キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つながるひとまちぶんか

つひまぶ 多国籍なキタ号

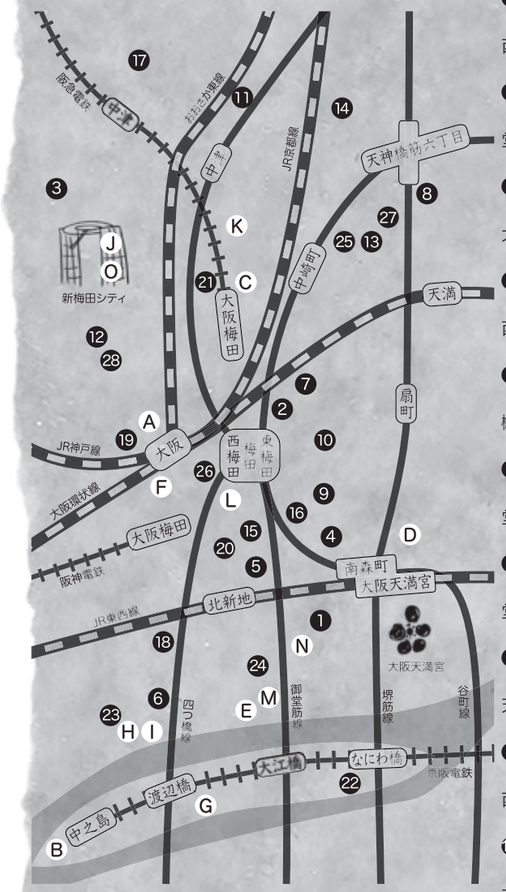
vol.23 2023年11月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.23　2023年11月1日発行　編集・発行：北区のおもろ通信団（編集長／浅香保ルイス龍太　編集スタッフ／秋山暁子・上田幸美・高橋愛典・西野仁・藤本賢司・松岡慧祐）**協力：**大阪市北区・北区コミュニティセンター・奈良県立大学地域創造研究センター　**連絡先：**【mail】tsuhimabu@gmail.com　【web】https://tsuhimabu.com　**定価：**0円　**主な配布場所：**大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンター・北図書館・大阪市住まい情報センター・大阪市北区社会福祉協議会・江之子島文化芸術創造センター・大阪市ボランティア市民活動センターほか多数（配布場所は web にて随時お知らせします） ※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

JR 大阪駅中央口、大丸梅田店の入り口付近に 2.9m×22.6m のどでかいレリーフが設置されているのをご存じか？　『曽根崎心中』のお初と徳兵衛や大阪城が真んなかに刻まれており、両サイドには左からサンクトペテルブルク、メルボルン、上海、サンフランシスコ、サンパウロ、ミラノなどを象徴するモチーフが刻まれている。メルボルンならカンガルー、サンフランシスコならゴールデンゲートブリッジ。これらの都市は大阪市と姉妹・友好都市提携を結んでいる都市で、このレリーフはまさに多国籍な大阪・キタを象徴するものなのだ。ところが、韓国の慰安婦像設置をめぐってサンフランシスコと姉妹・友好都市提携を解消したもんだから、タイトルプレート「世界にひらく大阪」が外され、なんやよう分からん作品になっている。まあしかし、上の人らの仲違いは勝手にしてもらって、民や草は仲良うしましょ。多国籍なキタ♪

北区の外国料理レストラン

ただし、フレンチとかイタリアンとか中華とかメジャーな国の料理は除外



❶ **ビストロ・ザ・虎月堂（南アフリカ）**
西天満 4-12-10-101

❷ **デスティネ（モロッコ）**
堂山町 5-14

❸ **ル・マラケシュ（モロッコ）**
大淀中 1-17-7

❹ **七つの丘～ Seven Hills（アラブ）**
西天満 5-16-3-B1F

❺ **RUDY' S CLUB（イスラエル）**
梅田 1-1-3 大阪駅前第 3 ビル B2F

❻ **大阪ハラルムガル 堂島店（パキスタン）**
堂島 1 堂島地下街 9 号

❼ **シナソス（トルコ）**
堂山町 16-12-2F

❽ **アイランドフィールド（インド・ハイチ・エジプト）**
天神橋 6-5-11-2F

❾ **サクラ パダウ（ミャンマー）**
西天満 6-3-5

❿ **UMEDA CHAUTARI（ネパール・インド）**
太融寺町 2-17-B1F

⓫ **バグース（インドネシア）**
中津 1-9-11-1F

⓬ **マレーシアボレ（マレーシア）**
大淀南 1-4-20-1F

⓭ **マラッカ（東南アジア全般）**
黒崎町 5-14

⓮ **カオヤム堂（東南アジア全般）**
本庄西 1-5-11

⓯ **フロッグス（東南アジア全般）**
梅田 1-11-4 大阪駅前第 4 ビル B1F

⓰ **NARI 屋（アジア多国籍）**
兎我野町 10-6-1F

⓱ **think 食堂（アジア多国籍）**
中津 3-10-4-1F

⓲ **アジアン天国（アジア多国籍）**
堂島 2-2-34-1F

⓳ **bills 大阪（オーストラリア）**
梅田 3-1–3 LUCUA1100 7F

⓴ **モスクワ プリュス シェミ OSAKA（ロシア・ウクライナ・ジョージア）**
梅田 1-3-1 大阪駅前第 1 ビル B1F

㉑ **ドルフィンズ 梅田店（ベルギー）**
芝田 1-5–2-1F

㉒ **スモーブローキッチン 中之島（デンマーク）**
中之島 1-2-10 中之島図書館 2F

㉓ **アマ・ルール（スペイン・バスク）**
堂島 2-1-16-1F

㉔ **Ragga Ragga（ジャマイカ）**
曽根崎新地 1-1-40-3F

㉕ **SOULWOOD（ジャマイカ）**
中崎 1-9-3-2F

㉖ **バルバッコア 梅田店（ブラジル）**
梅田 2-2-22 ハービス PLAZA ENT 5F

㉗ **食堂 N.A.（多国籍）**
浪花町 10-1

㉘ **ちゃぶ台バル 8※（無国籍）**
大淀南 1-2-5

インド料理店、タイ料理店、メキシコ料理店も、店舗数が多いため除外。
特に昨今のタコスブームに伴って、北区でもタコス専門店が増加中！

商都・大阪の北区にあるのは大使館ではなく領事館ばかり 名誉領事館もたくさんあるよ

Ⓐ **在大阪オマーン国名誉領事館**
梅田 3-1-3 伊藤忠商事（株）内

Ⓑ **在大阪インドネシア共和国総領事館**
中之島 6-2-40 中之島インテス 22F

Ⓒ **在大阪カンボディア王国名誉領事館**
茶屋町 12-6 エスパシオン梅田ビル 9F

Ⓓ **在大阪ミクロネシア連邦名誉総領事館**
天神橋 2 北 1-2 関西経理専門学校内

Ⓔ **在大阪カザフスタン共和国名誉領事館**
堂島浜 1-2-1 新ダイビル 31F

Ⓕ **在大阪ラトビア共和国名誉領事館**
梅田 3-3-5 大和ハウス工業（株）内

Ⓖ **在大阪イタリア総領事館**
中之島 2-3-18 中之島フェスティバルタワー 17F

Ⓗ **在大阪スペイン国名誉領事館**
堂島浜 2-1-40 サントリーホールディングス（株）内

Ⓘ **在大阪デンマーク王国名誉領事館**
堂島浜 2-1-40 サントリーホールディングス（株）内

Ⓙ **大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館**
大淀中 1-1-88 梅田スカイビル・タワーイースト 35F

Ⓚ **在大阪フィンランド名誉領事館**
芝田 1-16-1 阪急電鉄（株）内

Ⓛ **在大阪ベルギー王国名誉領事館**
梅田 1-13-1 大阪梅田ツインタワーズ・サウス 34F

Ⓜ **在大阪スイス領事館**
堂島 1-1-5　関電不動産梅田新道ビル 1F

Ⓝ **在大阪・神戸米国総領事館**
西天満 2-11-5 米国総領事館ビル

Ⓞ **在大阪メキシコ合衆国名誉領事館**
大淀中 1-1-88 梅田スカイビル・タワーイースト 23F

※一般的に、大使館は外交交渉、領事館は自国民の保護が目的。名誉領事館は自国からの派遣領事ではなく、設置先の国民を名誉領事として任命する。

編集後記

第 19 号から本誌の編集スタッフに加わった私は、20 号・21 号で記事を執筆した。しかし 21 号の発刊直後に英国に渡った。便利なもので 1 年弱の滞英中も、インターネット経由で編集プロセスを眺めていた。「帰国したら、23 号は編集会議に顔を出すのがせいぜいだな、24 号から復帰しよう」と思いつつ…。ところが帰国して 10 日ほどで、米国総領事館（11 ページ）の取材に通訳として同行し、大した役には立たなかったものの電光石火の復帰となった。総領事館 1 階で厳重なボディーチェックを受けながら思い出したのは、21 号の取材である。大阪高裁のなかにある書店にお邪魔するため、裁判所の入り口でボディーチェックを受けた。もはや、本誌の取材といえばボディーチェックだ。こうなれば、毒を食らわば皿までも。読者のみなさん、北区内で金属探知機を見掛けたら教えてください！次号以降で直ちに取材に参ります！でもじつは、意外と多くて厄介だったりして…。とにかく、情報お待ちしています！（愛）

つひまぶ web
https://tsuhimabu.com/
バックナンバー読めるよ！

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebook ページ「つひまぶ」までご連絡ください。

今や世界中から観光客が訪れる人気スポット

インバウンドだけではない、元々多国籍な中崎町

文・写真／浅香保ルイス龍太

Scene 1
多国籍＆無国籍のキタ

元来、マレビトがたくさんいたまち

中崎町のもう1つの顔

レトロなまち並みと新しい感覚がマッチして、今や世界中から観光客が訪れる人気スポットの中崎町（中崎町という地名はないが、俗称として）。かつては空き家の目立つ停滞気味のまちだったが、若いショップオーナーやアーティストたちがこのまちで自己実現をはじめたのをきっかけに、現在のような大人気スポットになっていった。しかし、実際にはそれだけではなく、じつは外国人もこのまちの活性化の片翼を担っていたことは、意外に知られていない。外国人がたくさんいるのも、じつは今にはじまったことではない。若いよそ者から外国人まで、このまちにはそこかしこにまちを活性化させる「マレビト」がいたのだった。

梅田と中崎町は、新御堂筋を挟んで隣り合っているエリアだけれども、たったそれだけのことでずいぶんと景色が違う。梅田は大阪の玄関口で各線のターミナルがあり、商業施設やオフィスビルが集積し、国内外から毎週180万人以上もの来街者を引き寄せている。ビジネスマンや観光客にとって、魅力的なエリアだ。一方で中崎町は、梅田から地下鉄で1駅、歩いても数分の距離にありながら、その雰囲気はまるで別世界。第2次世界大戦の大阪大空襲を免れた木造住宅や長屋が残るレトロなまち並みには、猫があくびをしているようなゆったりとした時間が流れ、ここだけ時代から取り残されたような錯覚に陥る。しかし、こちらも梅田に負けず劣らずの観光客に人気のエリアだ。

人気の秘密は、古い木造住宅をリノベしたカフェや古着店、雑貨店が無数にあり、新しい感覚と懐かしさが上手く溶け込んでいるところ。一時は住民の高齢化が進み空き家が目立つようになっていたが、町屋の改装により1997年（平成9年）にギャラリー『楽の虫』が、また1999年（平成11年）にアトリエ兼カフェ『創徳庵』（第1期）、2001年（平成13年）には舞踏家のJUNさんの『Salon de AManTo 天人（あまんと）』がそれぞれオープンした。以降、梅田に隣接している地域でありながらも家賃が手頃なことに目を付けたクリエーターや若いショップオーナーがカフェやハンドメイドの雑貨店やギャラリーをオープンさせ、「自己実現の装置としての長屋再生」を具現化させた店舗が古いまちに新風を吹き込み、新しいライフスタイルを発信した。2004年（平成16年）には芸術・文化とのコラボレーションと飲食業へのインキュベーションを目的に、のちに中崎町のランドマークとなる『コモンカフェ』がオープンし、中崎町の中崎町化が加速した。

もちろん生まれたときから中崎町で暮らしてきた人もたくさんいて、新旧の人たちが、少しずつ混じり合っていったことがまちの活性化につながり、まちの大きな魅力になっていった。以降、訪れる人が増え、中崎町はSNSを通じて世界中から注目されるようになり、日本人観光客だけでなく多数の外国人ツーリストが訪れ、コロナ禍直前のピーク時にはオーバーツーリズム特有の問題まで発生していたほどだ。

多少の軋轢がなかったわけではないが、中崎町に古くからあるコミュニティは、新しくやって来た若い人たちを上手に迎え入れてきた。たとえば、毎年冬に開催される地域主催の『中崎町キャンドルナイト』では、若い人たちが営業するいわゆる中崎町的な店舗が100店舗以上協賛し、活性化に一役買っている。

ここまでは、これまでにもメディアで幾度となく語られてきたストーリーだが、見逃されがちなのは、外国人の存在だ。じつは、新しい人たちの流入と時を同じくして、観光客ではない外国人がたくさん、中崎町に増えはじめた。

たとえば、学校法人山口学園。専門学校としては全国でも珍しい『ECC社会貢献・国際交流センター』のセクションを学園内に設け、地域コミュニティと連携を密にし、積極的に地域活動に参加している。北区民カーニバル、大阪開催の国際マラソンなど、センターを通じて学内公募に応募した学生たちが、たくさんの地域行事の運営にボランティアでかかわり、サービス・ラーニング／地域貢献の実践に取り組んでいるのだ。なかでも済美カーニバルや中崎町キャンドルナイトには、準備段階から参加している。2022年（令和4年）度実績で年間約46活動、約580人が参加。そのなかには留学生もたくさんいて、近年だと、台湾、中国、ベトナム、タイ、ミャンマーからの留学生らが数多く地域活動に参加している。留学生たちは、まったく物おじすることなく活動に飛び込み、地域の人たちと積極的に交流している。

コミュニティ・サロンとしても機能している古民家改装カフェの先駆け『Salon de AManTo 天人』には今日もさまざまなバックボーンを持った人たちが集まるが、そのなかには難民（難民申請中）の人たちがいる。天人では、2002年（平成14年）、行き場所のないネパールからの難民に宿泊できる場所を緊急に提供したことをきっかけに、『日本ネオ難民カフェネットワーク』を設立し、難民の生活支援を続けている。生活支援とは、宿泊する場所を含めて生活のすべてを支援するという、ハードルの高い支援だ。大阪ではここでしかやっていない。

「難民と偽って外国人を不法入国させ、タダ働きさせていると噂を流されたこともあります。でも、あるとき中崎町でボヤがあり、シェアハウスにいた難民たちが気付いていち早く消火活動に当たったことがありました。それをきっかけに地域の人たちと仲良くなり、理解が得られるようになりました」と、代表のJUNさんは話す。

中崎町にはそのような人たちが暮らす一角もあり、彼らを支援するために関心のある人々が集まり、定期的に情報交換をおこなっている。

中崎町の興味深いところは、この地で生まれ暮らしてきた人たちから見て異物とも思える外部からやって来た若い人たちや外国人たちを、紆余曲折ありながらも、結局は懐深くに迎え入れているところにあると思う。じつは在日コリアンやLGBTQの人たちも多い。民俗学上の概念では、このような外部からの人たちのことを「マレビト（客人）」と呼ぶが、このまちの人たちは、マレビトを迎えることによって、まちをマッサージし、結果、まちは活性化してきた。現在、中崎町には世界中から観光客が訪れにぎわいが生まれているが、それは今にはじまったことではない。以前から、このまちのそこかしこにマレビトがいたのだった。（終）

旅する映画作家リム・カーワイが描く 中崎町が舞台の映画『カム・アンド・ゴー』

大阪を中心に活動を続けている中華系マレーシア人リム・カーワイが、大阪3部作の最終章として発表したのが本作。中崎町を舞台にした在日外国人の群像劇だ。登場人物は9カ国・地域に及ぶ。出張で来阪したマレーシア人のビジネスマン、ベトナム人の技能実習生、専門学校に通いながらスーパーで働くミャンマー人の留学生、日本のAVマニアの台湾人、ネパール人の難民、ひと旗揚げに来た韓国人のおねーちゃんたち、その女衒、AV監督、ウチナンチュー。さまざまな言語と背景を持つ人たちが中崎町で行き交い、交わり、すれ違っていく。まさに、カム・アンド・ゴー。浮かび上がってくるのは、今の日本が抱えるさまざまな現実。今一瞬の中崎町を切り取った映画。

じつは難民支援もおこなっている 『Salon de AManTo 天人』

中崎町にて古民家を改装した店の先駆けとも言える『Salon de AManTo 天人（あまんと）』はさまざまな人が集まるコミュニティ・サロンだが、そのさまざまな人のなかには、じつは難民（難民申請中）の人もいる。天人のJUNさんが代表を務める『日本ネオ難民カフェネットワーク』では、日本の現状、日本に来て困っている難民の方々の情報や支援方法など一緒に考えるための情報交換や交流会を開催している。毎月1回、第3火曜日の19:00から、天人にて難民カフェを開催し、NGO団体や弁護士などの支援団体と当事者が集まり、情報交換をおこなっている。

地域の活動に積極的に参加する 学校法人山口学園の学生たち

中崎町一帯にキャンパスを構える学校法人山口学園では、専門学校としては全国でも珍しい『ECC社会貢献・国際交流センター』のセクションを学園内に設けている。その活動は、中崎町の清掃活動から地域のお祭りや大阪開催の国際マラソンなどへの運営参加をはじめ、福祉関係のものまでさまざま。学生たちは、センターを通じて多彩な活動にボランティアとして参加している。もちろん留学生たちも多数参加！　これらの取り組みは地域や社会と学園のあいだにつながりを生み、地域にとって、同学園は今では欠かせない存在となっている。

Scene 2
多国籍＆無国籍のキタ

20世紀末、バブルに踊ったツワモノどもが見た夢は

B面の中崎町物語

若い観光客が国内外から訪れ、SNSを通じて世界中に知られるようになった現在の「オシャレ・スポット中崎町」。現在のその姿からは想像もできないが、20 世紀末、日本社会がバブルに踊ったころ、「戦後最大のフィクサー」や「闇社会の帝王」と呼ばれたバブル時代の主役の１人・許永中がここに巨大な邸宅を構え、コリアンタウン建設を夢想していた。今となっては知る人は少なく痕跡も残っていないが、そんな時代があったのだ。

今や世界中から観光客が訪れる人気スポット
かつてバブル紳士たちが踊った時代があった

文・写真／浅香保ルイス龍太

許永中（きょ・えいちゅう）は、1947年（昭和22年）、中津のスラム街に生まれた在日韓国人実業家で、政財界からヤクザ社会にまで幅広く人脈を持ったフィクサーだ。1991年（平成3年）に戦後最大の経済事件と言われる「イトマン事件」、2000年（平成12年）「石橋産業事件」で逮捕され、保釈中にソウルで失踪するも東京都内で身柄拘束、その後は母国の韓国で服役、現在も韓国で暮らしていると言われている。「戦後最大のフィクサー」とも「闇社会の帝王」とも呼ばれたが、戦後の在日韓国人としての悲哀を全身に詰め込んだ人物でもあった。そんな彼が華々しく活躍していた時期、彼は中崎町に住み、コリアンタウンの建設を構想していた。

かつて中崎町で防犯活動に従事していた方が、高校時代、許永中と同級生だったとのこと。

「高校時代はそんなに目立った生徒ではなかったよ。みんな、永中！永中！と呼んでいました」。

「再会したのは50歳のとき。中崎町で車を運転していたら、後ろからベンツが近付いてきて、コワモテのおっさんが車から出てきて、拉致られた（笑）高校時代からずいぶん時間が経っていたけど、僕の顔を覚えていて、車越しに見付けてくれたというわけや」。

そこから許永中との付き合いがはじまった。

「当時、同級生がオープンさせたお店があって、そのお店を応援する意味もあって、同級生らで月に1回はそのお店に通ってた。許永中も1度連れて行ったことがあってね。するとある日、店にドンペリが6本届いた。同級生グループに飲んでもらおうと、許永中の計らいやったんやね。よく行くゴルフコースも、いつの間にか彼が買い取って、以後、僕たちは無料でプレーしてた」。

こんな話が次から次へと語られ、枚挙にいとまがない。

「とにかく豪快やったけど、同時にとても義理堅い男やったよ」。そうだったのだろうが、話を聞けば聞くほど、豪快な見た目とは裏腹にさびしがり屋だったのだろうと思えてくる。

「今から30年ほど前、私の父が町会長をしていたときに、許永中がやって来た」と、かつて許永中の邸宅があったエリアの町会長が話してくれた。

「今の毎日放送あたりから中崎町にかけての一帯にコリアンタウンをつくりたいとやって来て、片っ端から地上げをやっていたよ。立ち退いたりしないと言っていた中華料理店も、大金を積まれて立ち退いた。極真会館が建っていた場所は、元々は銭湯、理髪店、牛乳屋さん、そして長屋。当時の地上げやから、荒っぽかったよ」。

そう、中崎町には、「迎賓館」と呼ばれた要塞のような許永中のビルがあり、極真会館の道場が入っていた。許永中の大邸宅もその隣にあった。ロールスロイスにベンツが4台、そして極真空手の使い手が約10人、いつもボディーガードとして許永中の周囲を取り巻いていた。正月ともなると、巨大なタイが運び込まれたそうだ。近隣には警察官もしばしば様子を見に来たし、テレビの取材もよく来た。

「（今でも営業している）近くの理髪店でよく散髪してたよ。散髪が終わると、スッと1万円札を出してね。印象は例の黒縁メガネのまんまだけど、偉ぶるかんじはなくて、普通に話せる人やったね。ただ、常に取り巻きのボディーガードがいたので、威圧感がすごかったな」。

その取り巻きも、許永中が逮捕されると、住んでいた「迎賓館」の所有権が別の人物に移り、立ち退きを迫られて揉めていた。それまで地上げで立ち退かせていた連中が、今度は立ち退きを迫られる側にまわったわけだ。因果応報と言うべきか。その「迎賓館」には今ではマンションが建ち、当時の面影はかけらもない。

お聞きした話がエグ過ぎて書けないことも多いが、とにかく戦後経済界の闇を一身に背負い、金で横っ面を叩くような地上げを繰り返し、金で動かぬ人には非合法な手段を用いて立ち退かせ、このまちにコリアンタウンの建設を夢想しつつ、帝王のように過ごした。しかしその帝王は義理堅く、さびしがり屋でもあり、心根が優しい人物でもあるという1面も持っていた。

中津のスラム街で生まれ育った許は、自ら歩んできた道のりを「レールのない真っ暗なトンネル」と呼んでいる。

日本人社会で成り上がろうとした在日韓国人2世にとって、生きるための道しるべはなかったという意味だろう。トンネルのような暗闇を手探りで進み、ようやく抜け出せたと思ったのが、バブル景気という幻の繁栄だった。しかし、華やかな世界にたどり着いたと思ったその先には、足を着ける場所はなかった。

「ここは元々いろんな人が住んでいるまち。民族や身分などではなく、人物だけを見て付き合いをするという感覚があった」。

先述の町会長が語るように、オープンなマインドがこのまちにはある。許永中がここにコリアンタウン建設を夢想したのも、案外、このまちのそんな気質を感じ取ってのことかもしれないと、今、多くの若者を引き付けているこのまちの姿を見て、思うのだった。（終）

『大阪韓国文化院』は韓国文化のカルチャーセンター？

外観正面の最上階あたりに「韓国民団大阪府本部」と大きな字が掲げられているので、なんとなく入りにくい雰囲気はあるのだけれども、入ってしまえば、ごく一般的な小規模博物館＆カルチャーセンターといった趣。

入り口には東アジア国際交流の祭り『四天王寺ワッソ』に登場する舟だんじりのミニチュアが展示されており、文化施設の香りがする。

韓国の伝統的な文化芸術だけでなく、韓流映画やドラマ、K ポップに K ダンスなどの最新文化コンテンツまで、折々に展示されるジャンルは幅広い。

生活用具の展示もあり、特に韓服はチマチョゴリ（女性用）、パジチョゴリ（男性用）、セクトンチョゴリ（子ども用）が冠帽から靴まで一式揃っており、実際に着ることができる。

また、毎年４月～12 月には体験型文化講座「K-CULTURE アカデミー」が開催され、ポジャギ講座、韓国伝統弦楽器のカヤグム講座、伝統歌唱のパンソリ講座、テコンドー講座など、さまざまな韓国文化を学ぶことができる。図書室が備えられており、日韓の歴史や在日コリアンなどに関する書籍が充実している。

中崎西のおしゃれゾーンの１本東にある『大阪韓国文化院』。

李朝箪笥のような民具が展示されている。

チョゴリを着ることもできる。

大阪韓国文化院
中崎 2-4-2-4F
TEL.06 - 6292 - 8760
https://www.k-culture.jp/
月～金／ 10:00 ～ 18:00
土／ 10:00 ～ 17:00
休館日／日・祝、年末年始、韓国の一部の祝日（3/1・8/15・10/3・10/9）

かつて存在した『ひがし茶屋町西向不動尊』

大阪メトロ中崎町駅から北へ歩くとすぐのところに境内が三角形の浄方寺があり、さらに北上するとすぐに四つ辻がある。その辻の南東角に、1990 年代のころ、かつて不動尊を祀る神社があったことを知っている人は、今はもう少ない。

かつて『ひがし茶屋町西向不動尊』と彫られた碑があり、立派な石灯籠が林立するなかに、矜羯羅（こんがら）童子と制吒迦（せいたか）童子の 2 童子を従えた不動明王が鎮座していた。玉垣には、イトマン事件関係者やバブル時代の素性の怪しい方々の名前が多数彫られており、一見して、普通ではない。宗教的な神々しさよりも、なんだか不自然にお金が掛かっていそう（逆に不自然にお金が掛かっていなさそうなところもあった）…、という神社で、不動明王を信仰していた許永中が建てたものと言われている。「ひがし茶屋町」と名付けられていたのだけれども、このあたりは茶屋町ではないし、東茶屋町という地名も存在しない。

このお不動さんは、イトマン事件で許永中が逮捕された前後に路地を挟んですぐ西側に移転され、その後さらに移転、最終的には赤穂方面の方に引き取られたようだが、詳しいことは分からない。

来歴も、どこかの宗教法人から買い取ったものだとか、魂入れも魂抜きもしていないのではないかとか、不確かな話ばかりが錯綜し、本当のところは杳として知れない。それほど多くの記録が残っているわけではないのだ。

20 世紀末、銭カネをめぐって右往左往したツワモノどものダンスを、このお不動さんはどんな思いで見つめていたのだろうか？

Scene 3
多国籍＆無国籍のキク

旧町名とレアな外国レストランが交錯する ワンダーゾーン・西天満

文／秋山暁子

西天満一丁目から六丁目 極私的ガイドブック

天満は、太閤さんの時代に大坂城下の整備と同時進行で寺内町として開発がはじまったまち。大坂城の西に形成された北組・南組とともに、旧淀川（大川）の北側に天満組として大坂三郷を形成した歴史があります。天満青物市場はもちろん、生魚商や塩干魚商、造り酒屋をはじめ酒造りに関連する職人、さらには各藩蔵屋敷などもあり、隆盛を誇りました。

そんな天満のなかほど、太閤さんが開削した天満堀川の西側は「西天満」と呼ばれ、1832年（天保3年）に刷られた地図『浪華名所獨案内』にも、しっかり「西天満」と記されています。

元禄時代（1688年～1704年）の水帳（検地帳）によると、天満堀川から西堂島までに18の町があったそうです。1889年（明治22年）の大阪市制施行以降、幾度もの町名改編を経て、1978年（昭和53年）以降は西天満一～六丁目というシンプルな町名になりましたが、まちを丹念に歩いてみると旧町名の痕跡が残っています。と同時に、現代ならではの珍しい外国料理の飲食店も見られる西天満。過去と現在を行ったり来たりしながら、のんびり歩いてみたいと思います。

最初に向かったのは、古美術商が集積する老松通り、**旧老松町**です。新御堂筋沿いの入り口には、「天満宮　是ヨリ東七丁」と刻まれた石碑があります。この通りは別名「鳥居筋線」。1kmほど先の大阪天満宮へ向かう表参道として栄えたまち。大きな松の古木があり、神功皇后が朝鮮半島の新羅遠征の帰りにここに船をつないだという伝えが町名の由来。通りに面したコンビニ前の植栽のなかに、老松町一～三丁目の旧町名継承碑を見付けました。そういえば、近年整備された堂島川の護岸は、若松浜だったな…。老松通りを途中で南へ曲がると大阪高等裁判所が見えます。ふと左前方に目をやると「ニュー若松ビル」、その向かいに「ニュー真砂ビル」。じつは、この道の東が**旧若松町**で西が**旧真砂町**でした。町名は消えても、ビルの名前にしっかり刻まれています。裁判所北西角には真砂町の継承碑が。

若松浜には水都大阪を楽しめるクルーズ船の船着場があり、若松町の継承碑はここにあります。鉾流橋を挟んで東の天満警察署の南側に、突然鳥居が出現。ここは、天神祭の最初の神事「鉾流神事」がおこなわれる場所なのです。鳥居両側の「乾物商」と刻まれた石灯籠に、乾物商組合が1910年（明治43年）に建立したと記されています。少し東、白壁の土蔵が残る菅原町は、乾物問屋街でした。

西に進むと、再び大阪高等裁判所。その敷地は鍋島（佐賀）藩蔵屋敷跡で、船入橋の碑があります。船入橋とは、蔵屋敷に船で荷物を直接運び入れるために設けた入堀に架けられた橋。ここ**旧絹笠町**には「堂島ビルヂング」「大江ビルヂング」といった大正レトロ建築が残ります。堂島ビルヂングは御堂筋沿いに建つオフィスビル。昭和・平成の大改修を経てもなお、100年以上の歴史が醸し出す重厚感をビシバシ感じさせてくれます。1階上部に当たる外壁に埋め込まれた深緑の四角いプレートには、銀杏と「堂」の字の文様が刻まれています。内部はさらに格好いいので、近くに寄ると用がなくても入りたくなるんですよね。大江ビルヂングは、弁護士事務所の入居を見越して建てられたのだとか。正面玄関の雨よけを支える部分の細やかな意匠や、側面の格子窓なんかもグッときます。

長くなり過ぎるのでレトロ建築はこれくらいにして、東に進むと**旧樋之上町**。1968年（昭和43年）に埋め立てられた天満堀川には、堂島川への樋門がありました。町名の由来は、そこからのようです。天満堀川跡に沿って北上すると**旧源蔵町**。継承碑は、大阪西天満郵便局隣の「イワイビル」にひっそりと。源蔵町には日本人の手による初のビール醸造をおこなった渋谷庄三郎の家があり、綿問屋を営みつつ清酒の醸造もしていたとか。そういえばこの東は旧樽屋町！

ここより北は、道に沿って南北に旧町が形成されていました。天満堀川に沿って続く**旧西堀川町**の継承碑は国道1号線北側の「ザ・セヤマビル」の西に。入居する勢山竹材店は天満堀川の水運を利用した竹材商で1722年（享保7年）創業の超老舗です。北の端、堀川戎神社鳥居横の電柱に「西堀川北11」のプレート。

その西には、**旧伊勢町**、**旧富田町**、**旧木幡町**と続きます。1657年（明暦3年）の『新板大坂之図』に「いせ丁」「とんた丁」と記されている、大阪でも古い町名の1つのようです。821年（弘仁12年）に源融（みなもとのとおる）が伊勢神宮の分霊をこの地域付近の孤島に勧進して、夕日神明社を創建したことにちなんで伊勢町、その御料地の富田町。源融は光源氏のモデルの1人で、ここから北西にある「太融寺」も源融ゆかりの寺です。富田町の継承碑は国道1号線、西天満東（どっちや（笑））交差点の南西角に。なお、木幡町も夕日神明社にちなんでいると西天満小学校横の継承碑に書かれていますが、詳細は不明。

鉾流橋へ続く裁判所東線を渡った先は、**旧梅ヶ枝町**。西天満交差点の北西角を少し北上した歩道脇に継承碑があります。1872年（明治5年）に、現在の太融寺町にあった綱敷天神社の御旅社が梅塚の地から梅ヶ枝町に移り、数年間鎮座していたそうです。御旅社はその後、茶屋町に移って現在に至ります。

余談ですが、旧梅ヶ枝町には、関西テレビ旧本社跡のだだっ広い敷地が、駐車場として残っています。少し西の電柱に「カンサイTVマエ7」のプレートを見付けた私は、おぉ！となったのでした。（終）

西天満のレアな外国レストラン

アラブ料理専門店七つの丘～ Seven Hills
西天満 5-16-3 西天満ファイブビル B1F
（火～金）17:00 ～ 22:00
（土日祝）11:30 ～ 14:00/18:00 ～ 22:00

扉を開けるとフワッとスパイスの香りに包まれる。ヨルダン人シェフのつくるアラブ料理。休日ランチにメインで注文したチキンポテトフッハーラは、複雑なハーブの香りとホロホロのお肉に思わず笑みがこぼれてしまう。シェフはコロナ禍直前に来日。元々の輸入業を辞め、趣味だった料理を仕事に変えたそう。単なる趣味からはじまったとは思えない本格的な料理はもちろん、毎月第４金曜日夜のベリーダンスショーも気になります。

ミャンマー居酒屋 サクラ・パダウ
西天満 6-3-5
17:30 - 21:30　日月休み
※日曜は予約があれば開店

ミャンマー料理といえば、それほど辛くないカレーのヒン、そしてうどん麺のような麺料理。味付けは濃いけどクセがないので日本人の舌に合います。アットホームな居酒屋スタイルで、晩ごはんにヒンだけ食べて帰るのも、もちろん OK。今日は鴨肉を使ったベーダーヒンを。鴨肉がゴロゴロ入って、満足感がデカいです。「ございます」を連発する店主のミミレさんは、来日 37 年目の日本語が達者な楽しい店主。店内の世界地図を見ながらミャンマーのことをいろいろ教えてくれます。

Scene 4
多国籍&無国籍のキタ

おかげ様ブラザーズのサックス奏者からアイリッシュ音楽へ。金子鉄心さんの旅は続く

文／浅香保ルイス龍太

今から13年前の2010年（平成22年）のこと。北区民センターで北区子ども・子育てプラザが主催する親子向けイベント『音楽で世界を旅しよう』が開催され、スティールパン（中南米の国トリニダード・トバゴの民族打楽器。ドラム缶からつくられている）などに合わせて、金子鉄心さんが、世界中のさまざまな笛を次々に吹くというパフォーマンスを繰り広げた。アイルランドのティン・ホイッスルを吹いたかと思えば、次は尺八と、地域もかたちもまったく違う管楽器をアクロバットに操るのだが、それが不思議と違和感なく調和していて、すげー！と高揚しながらステージに魅入っていた。

そんな鉄心さんは、じつは、80年代半ばには『人間ポンプ』をスマッシュヒットさせた「おかげ様ブラザーズ」のサックス奏者として、名を知られた人でもある。

ざっくりと経歴を振り返ってみよう。

中高時代はサックス、大学で尺八を。その後、おかげ様ブラザーズではファンクやロックを演奏され、最初からジャンルもカテゴリーもない活動をされてきた鉄心さんだが、メジャーデビュー後もその傾向は続く。おかげ様ブラザーズ解散後は、ギタリストの押尾コータローさんと「オーサカ・エグザイル」を結成し、ミュゼット（20世紀初頭にパリで生まれたカフェの音楽）やアイリッシュ音楽を奏でるようになる。さらに現在はアイリッシュ民謡を奏でる「鞴（ふいご）座」、「みわトシ鉄心」を活動の拠点とし、日本で10人くらいしか演奏する人がいないと言われるイーリアン・パイプスを自在に操るレジェンド・パイパーとして、多くのミュージシャンとも共演を果たしている。メジャーデビュー前もその後も幾多のジャンルを横断され、キャリアそのものが世界音楽紀行のような人なのだ。

ぜひお会いしてお話をお聞きしたいではないですか。恐る恐るオファーを出すと、ご快諾。台風の近付く夏の昼下がり、立派な顎ひげを蓄えた鉄心さんにお会いしたのだった。

そもそも、ロックやファンクの王道エンタメ路線でブレイクしたのに、なぜアイリッシュ音楽に急カーブを切られたのだろう？　まずはそのあたりのことから、鉄心さんにお話をお聞きした。

イーリアン・パイプスからサックスまで、さまざまなパイプを操る管楽器奏者・金子鉄心さんの最新情報は『金子鉄心のパイパーな日常』を。https://www.kanekotessin.com/

「1994年（平成6年）、奈良の東大寺でユネスコ主催の『あおによしコンサート』が開催されたんですよ。東大寺の大仏開眼法要の現代版。ボブ・ディランや布袋寅泰らとともに、今思えばスーパー・レジェンドな人たちですが、アイリッシュ音楽の重鎮であるザ・チーフタンズが出演していたんです。そんなバンド、知りませんでした。でもそれを見て、なんじゃこら！と。度肝を抜かれました。それまでまったく聞いたことのない音楽で、こういう音楽があるのか、と。まるで異界の人たちのようでした」。

30年近く前の出来事を昨日のことのように話す鉄心さんから、そのときに受けた衝撃の大きさがうかがえるというものだ。

音楽リスナーがいろんなジャンルの音楽を気軽に聴くのは自然なことだけど、すでにプロの第一線でバリバリやられている方が新しい音楽に出合い、衝撃を受けるなんてことがあるんだなと思いながら、話の続きを聞いた。

「おかげ様ブラザーズが解散したのが1996年（平成8年）です。ロックのフォーマットだと、ホーンの音というのは、埋もれてしまいがちなんです。最後はそのストレスがあって、今度は自分の演奏がちゃんと聞こえる音楽を（笑）と、アイリッシュ音楽に取り組むようになりました」。

取り組むようになったと簡単におっしゃるが、アイリッシュ音楽といえばイーリアン・パイプス。これが独特の仕組みを持った楽器で、一見しただけではどうやって音を鳴らしているのかすらもよく分からない、難しそうな楽器だ。「パイプ」とあるのに、口で吹くのではなく、皮袋（バッグ）に空気を送り込むために肘に鞴（ふいご／ベロ）をくくり付け、ベロを肘で押してバッグに空気を送る。

「メロディを奏でるためのチャンタ（パイプ）、通奏音の和音を奏でるドローン、キーボードの役割をするレギュレータで構成されており、1人3役のようなことをしながら演奏するので、1つの楽器を奏でているとは思えない重厚な音になります。僕がイーリアン・パイプスをはじめようと思ったときはまだ、日本にはこの楽器はほとんどなかった。インターネットがない時代だし、まずどうやって楽器を手に入れるのかを調べるところからはじめなければなりませんでした。大阪ミナミに『マーフィーズ』というアイリッシュ・パブがあって、そこで先人に出会い、手ほどきを受けたりしていました」。

何度説明を聞いても、頭がこんがらがるようなややこしさだ。

「最初にパイプスを手に入れたのは、2003年（平成15年）。練習用のセットで、鞴とバッグ、チャンタのシンプルなものです。イーリアン・パイプスって、職人にオーダーしてつくってもらう楽器で、既製品というものがないんです」。

「〝手に入れるのに7年、練習に7年、熟成させるのに7年〟と言われている楽器です。とても不自由な楽器だけど、不自由ゆえに工夫を重ねて、いかにおもしろい演奏をしてみせるかが楽しいんです」。

楽器の魅力もさることながら、鉄心さんがそうまでしてのめり込むアイリッシュ音楽の魅力とは、なんだろうか？　そもそも、日本から遠い土地の音楽だ。

「アイリッシュ音楽にかぎらず、民族音楽の良さって、倍音（基音の上に重なるたくさんの音。音色の個性をつくるもの）を大切にするところだと思います。倍音をカットするのではなく、味や匂いとして大切にする。洗練されていないところに魅力があるのかもしれない。人間くささというか、雑味というか。僕はそういう倍音成分の多い音楽は好きですね。それに、イーリアン・パイプスのチャンタと雅楽の篳篥（ひちりき）はどちらもダブルリードで演奏するし、笙（しょう）はレギュレータのように和音を奏でるので、アイリッシュ音楽と邦楽器や雅楽は似てるんですよ」。

アイリッシュ音楽と雅楽に共通点があるなんて考えもしなかったが、大学で尺八を学んでこられた音楽家ならではの視点が興味深い。では、両者の音楽文化の違いはどうだろうか？

「日本には日常に生音の音楽がない気がします。たとえば、祭りで囃子を奏でる人が、日常的に囃子を演奏しているかというと、そうでもない。テレビやスマホには音楽があふれているけれど、生音となると、ハレとケに分けられている気がします。その点、アイルランドでは日常に音楽があります。路上やバーで演奏している人がとても多い」。

この夏はコロナ禍が明けて、祭りや盆踊りがフルスペックで開催されたことも多く、それこそ生演奏を耳にする機会は増えたが、たしかにそれらはフェスやコンサートとおなじハレの音楽なのかもしれない。

「オーサカ・エグザイルは、結成当初、梅田の地下の阪神百貨店前の広場で演奏をして、投げ銭をもらっていたことがあるんですよ」。

今、キタでは地上でも地下でも路上で容易に演奏できる環境にはないけれども、かつてのように、路上でふらっと演奏できるような環境が整ったなら、またひとつ都市の懐が深くなり、今以上に多くの人を引き付ける都市になるのかもしれないと、鉄心さんの心温まる演奏を聞きながら思うのだった。

（終）

中之島で「ガムラン」を体験。想像以上の気持ち良さにびっくり！

大阪大学中之島芸術センターでダルマ・ブダヤのガムラン体験教室『日曜ガムラン』に参加した。サイトや YouTube でライブ映像などを見て予習をして臨んだが、どのように練習をするのか？　すぐに演奏ができるのか？　など疑問と不安を抱えての参加だった。

会場に着くと、青銅製打楽器や太鼓が並べられダルマ・ブダヤのみなさんが練習をしていた。

「ガムラン」はインドネシアの民族音楽で 10〜20 名で演奏される。なかでもジャワ・ガムランは中部ジャワの伝統文化のなかで育まれ、ゆったりと優雅に流れるような音が特徴である。元来宮廷の音楽として発達し現代では王宮での儀式、割礼式のお祝いや、結婚式・村祭りなどで演奏される。

大阪大学を拠点に活動するダルマ・ブダヤは、1979 年（昭和 54 年）に結成された長い伝統を持つ楽団だ。

２時間の体験教室では打楽器の演奏にトライした。打楽器の鍵盤には数字が記されており、ホワイトボードに書かれた数字（楽譜が数字）を見て、同じ数字の青銅製の鍵盤を木槌で叩く。鍵盤は木の台のようなものの上に並べられている。台の下がくり抜かれているものや、鍵盤の下に筒が据えられているものなどがある。叩いた瞬間から鍵盤の下の空洞で音が響くが、一定の音量で続かず緩やかに変化する。空洞で膨らんだ音が青銅製の鍵盤に跳ね返り新たな音の響きが生まれているようなかんじがした。

10 人以上が同じ数字が書かれた鍵盤を叩いているのに音が違うのが不思議だ。自分で叩いて出した音や前後に座って叩いている人の音が自分を包み、やがて参加者全体が包まれているような感覚になり、とても気持ちが良かった。

「音が降ってくる」と、メンバーの松田仁美さんがおっしゃったのが印象的だった。気持ち良さの正体を言い当てているようで、その言葉が１番しっくりくる体験だった。（むしまつ）

ダルマ・ブダヤのガムラン・ワークショップ
月に１回を目指し定期的に休日の午後、中之島の大阪大学中之島芸術センターにて開催。約２時間のガムラン体験教室は誰でも参加無料。
https://www.facebook.com/DharmaBudayaJapan

商都・大阪キタには各国の領事館がたくさん

Scene5 領事館って、どんなところですか？

多国籍&無国籍のキタ

文・写真 西野 仁

在大阪カンボディア王国名誉領事
山田英男さん

自分より弱い人を泣かしたことはない。日本とカンボジアの関係性もそこにあります。

阪急大阪梅田駅茶屋町口前にあるエスパシオン梅田ビル9階にビザ発給業務をおこなうことができる「在大阪カンボディア王国名誉領事館」があるのをご存じだろうか。この領事館の名誉領事を務めるのは山田不動産を含む山田グループの山田英男会長。御年84歳の豪快な御仁だ。

2000年（平成12年）9月にカンボジア王国外務国際協力省と日本国外務省の推薦により山田会長が名誉領事に任命され、翌2001年（平成13年）4月に梅田・茶屋町にある自社ビル内に日本で初めてカンボジア王国の名誉領事館が開設された。表記が「カンボジア」ではなく「カンボディア」なのは、現地の発音に近付けたいというこだわりがあるそうだ。ビザ発給をおこなう領事館を民間人が運営するのはレアケースで、よほどカンボジア王国からの信頼が厚い人物でないと任せられないはずだ。名誉領事を引き受けるきっかけは何だったのか？　山田会長にお話をうかがった。

「アメリカのパームスプリングスで神戸ステーキレストランを経営していたときに、カンボジア難民を従業員として受け入れていました。それがきっかけでカンボジア政府の関係者がお店を訪れて、交流を深めるうちに、国家再生への助力を請われるようになりました」。

その後、アンコールワットが世界遺産登録されたことを機に、観光立国を目指すカンボジア政府が大阪に領事館の設置を検討する。そんな折、政府高官が山田会長のオフィスを公式訪問した際、神戸や京都とネットワークを結ぶ阪急電車を見て興味を持ち、領事館設置を打診。それを受けて、カンボジア王国に役立てばと山田会長が快諾したという流れだ。

「弊社を訪問されたのは、現カンボジア王国首相のフン・マネット氏です。彼とは、エイズに苦しむカンボジアとベトナムのために一緒にゴム園を経営し、コンドームをつくっていた仲です。私が不動産業で培った経験を元に国境地帯の土地を買い、ゴム園をつくり、カンボジアからベトナムへコンドームを出荷していました。ゴム職人のために飯場もつくり、まちづくりにもかかわりました。じつは彼のお父上のフン・セン元首相とは、ゴルフを通じて古くからの知り合いなんですよ」。

なるほど、カンボジア王国からの信頼が厚いわけだ。そのカンボジア王国との縁は23年目となり名誉領事館は関西における情報発信拠点の役割を果たしている。

山田会長は「私は自分より弱い人を泣かしたことはない。日本とカンボジアの関係性もそこにあります」と語った。（終）

在大阪・神戸米国総領事館
渉外広報部部長 アカシュ・スーリさん

領事館と大使館はワンチーム 日米双方の国と国、人と人、商いと商いをつなぐ懸け橋

大阪の交通の要である御堂筋と新御堂筋が合流する西天満・梅新南交差点近くの星条旗がはためくビルが「在大阪・神戸米国総領事館」だ。現在の総領事はジェイソン・R・クーバス氏が務めている。総領事館の開設については諸説あるが、神戸メリケンビル（旧神戸郵船ビル）には領事館開設を記した銅製の銘板が残っている。また明治初期には旧神戸居留地十五番館に領事館を設置するなど旧居留地内を移転した形跡が残る。その後、神戸から西天満に移転し駐大阪・神戸米国総領事館として運営が開始されている。その名残で現在の総領事館の名称に「神戸」が併記されている。ちなみに文献やネットで調べると「在大阪・神戸米国総領事館」と「駐大阪・神戸米国総領事館」の表記が混在しているので総領事館で確認すると、もともと「在」というのは建物に対して、「駐」というのは駐日大使のように人に対して使用するらしい。総領事館には「大阪・神戸」と2地名にまたがる表記があることから、建物を示す「在」を使用するより、総領事という人に対して使う「駐」が適切だとされていたそうだ。ただ、数年前からは在外公館はすべて「在」に統一しており、現在の正式名称は「在大阪・神戸米国総領事館」となる。

「漢字は難しいですね（笑）」と笑顔で答えてくれたのは、渉外広報部部長のアカシュ・スーリさん。5カ国語を操り、バスケットボールと2人の子どもをこよなく愛し、居酒屋という日本文化を開拓している米国国務省の外交官だ。総領事館と大使館に赴任された経験を持つスーリさんに両機関の違いをうかがった。「いい質問ですね。総領事館も大使館も同じような仕事をしています。私たちはワンチームです。総領事館の仕事はより地域に密着しており、私たちにはこの地域に住むアメリカ国民にサービスを提供する責任があります。この総領事館では17の府県を管轄します。総領事館は主にパスポートとビザ発給のサポートや緊急時の支援などをおこなっています。私たち広報部は女性の地位向上や気候変動など日米双方にとって重要な問題をテーマにしたプログラムを企画・運営します。スポーツ外交も人気があり、学生交流の促進も広報部の仕事です。G7や大阪・関西万博、独立記念日のレセプションにも携わり、各地のリーダーと会合を持ち、地元の人々にとって何が重要なのかを理解するように日々努めています」。

アメリカ政府では、以前から、リーダーだけではなく国民そのものを巻き込む施策を重要視し、国民の優先事項や関心事をより良く理解するためには交流の機会が役立つと認識していたそうだ。スーリさんは「学生交換プログラムには特別な感情で取り組んでいます。私は移民の子ですが、アメリカで外交官となり、私にとって世界最高の仕事に就くことができました。アメリカンドリームとも呼べるこの貴重な経験を学生たちに話し、共有し、交流に生かしてもらいたいと考えています」と話す。総領事館は、未来ある若者たちにも門戸を開いている。そんなスーリさんから、北区のみなさんへメッセージがある。

「北区で電車に乗ると、湾を横切るように水の上を走り、小さな川を渡り、水の都の美しさに自然と笑顔があふれます。緑も建物も多く、非常に活気に満ちた成長エリアにコミュニティの一員として総領事館を受け入れ歓迎してくださっていることに感謝します。ぜひ総領事館のSNSをフォローして私たちが開催するイベントに参加してください」。

スーリさんのアメリカンドリームは、日米の懸け橋となり、この北区に大きく架かっている（終）

在大阪・神戸米国総領事館の SNS
Instagram：@usconsosakakobe
Facebook：https://www.facebook.com/USConGenOsaka/
X(旧 Twitter): @USConsOsakaKobe

在大阪メキシコ合衆国名誉領事館
積水ハウス梅田オペレーション（株）
総務部長 村上猛さん
名誉領事館スタッフ 三村周子さん

陽気なメキシカンの困ったときの駆け込み寺

新梅田シティでメキシコといえば、2019年（令和元年）まで開催されていたメキシコ文化のフェス「フィエスタ・メヒカーナ大阪」を思い浮かべる人も多いのでは？「私たちもボランティアとして手伝っていました」。そう語るのは梅田スカイビルタワーイースト23階の積水ハウス梅田オペレーション株式会社（以下、SUO）総務部長の村上猛さん。じつはこのSUO内に「在大阪メキシコ合衆国名誉領事館」がある。「問い合わせがさまざまなので大変です」。そう答えるのは名誉領事館スタッフの三村周子さん。お2人はメキシコ人からのSOSに日々手を差し伸べ、奮闘されている。

名誉領事館の開設は2001年（平成13年）、在大阪メキシコ合衆国総領事館閉鎖の際、知己を得ていたSUOを通じて積水ハウス株式会社に名誉領事就任の依頼がなされ、これを受託したことに端を発する。翌2002年（平成14年）にSUO内に名誉領事館が開設された。現在は積水ハウス元副社長の内田隆氏が名誉領事の任に就かれている。

名誉領事館は1府9県を管轄し、主な業務はメキシコ人の保護と文化紹介や政府関係者のアテンドなどで、ビザの発給はおこなっていない。また、サラペ（メキシコの伝統的な織物）やソンブレロ（帽子）、パペルピカド（飾り紙）といったメキシコ所縁の物品の貸し出しもおこなっている。

メキシコ総領事館の閉鎖と名誉領事館の開設という貴重な経験をされた三村さんは、「両領事館で働いて、メキシコに関わる方の人生の背景が見えてきます。相談業務は人生相談。そう思って真摯に対応しています」と話す。この名誉領事館は、陽気なメキシコ人にとって「困ったときの駆け込み寺」なのだ。

2024年（令和6年）2月6日～5月6日には中之島の国立国際美術館で特別展「古代メキシコーマヤ、アステカ、テオティワカン」が開催される。みなさんもメキシコ文化に触れてみてはいかがだろうか。（終）

Scene 6

多国籍&無国籍のギク

JR大阪駅の祈祷室

文・写真／浅香保ルイス龍太

大阪ステーションシティ（JR大阪駅）に「祈祷室」が設けられているのご存じだろうか。2014年（平成26年）、駅南側のサウスゲートビル1階、南ゲート広場の西端に開設された。日本語・英語・中国語・韓国語の4カ国語で表記されている。

大阪ステーションシティ3階にあるインフォメーションに事前に申し込んで利用する。事前申し込みと言っても、空いていれば、直前の申し込みでも利用できる。利用時以外は施錠されており、自由に出入りすることはできない。利用は1組1回につき最長20分。団体でも個人でも利用できる。イスラム教徒のみならず、どんな宗派の人でも利用できるが、利用目的は祈祷にかぎられる。飲食、飲酒、喫煙や火器の使用、寝そべり、携帯電話の使用等は不可、再入室はできない。

祈祷室は関西国際空港はじめいくつかの施設にあるが、駅構内に限定すると、全国でもJR大阪駅だけだそうだ。万博開催を控え、観光都市としての大阪を感じさせる場面は多々あるが、この祈祷室ほど多国籍なキタを実感させる場所はないのではないだろうか。

「外国人旅行者の急増に伴い設置したもので、大阪ステーションシティの滞在促進につながればとの思いもあります。また、旅行者だけでなく、大阪在住の方も利用されます。じつは常連の方もいらっしゃいます。1日20～30名、1カ月300～350名ほどのご利用があります」。大阪ターミナルビル株式会社企画部企画・広報グループ清水宥大さんがお話してくださった。

祈祷室は、男女別々で礼拝できるように別室が用意されており、ウドゥー（礼拝の前に心身を清める洗い場）も用意されている。

天井を見上げると、方位記号がプリントされており、ある方角には黒い小さな点が記されている。メッカの方角だそうだ。床には絨毯が敷かれている。

利用者からは「ウドゥーにティッシュが据え付けられていることもさることながら、また日本製のティッシュの使い心地の良さに感動した」とのエピソードも。

「祈祷室」と名付けられてはいるが、特定の宗教に偏った施設ではなく、宗教的な装飾や演出がなされているわけではない。質素で無機質な空間だが、清浄な雰囲気が保たれており、襟を正したくなる。

それはきっと、利用される方々が神聖な気持ちで利用するからなのだろう。（終）

キタのええもん

キタの手みやげ

天満の水を使った昆布だしのクラフトビール『天満天神えーる』

今回、ご紹介するのは新発売された天満の地ビール『天満天神えーる』です。僕が暮らす足元でプッシュされている地元の地ビールを飲まずして、ビール党は名乗れません。聞くところによると、天神橋2丁目にある『天満天神MAIDO屋』に置いてあるのだとか。ネットにも情報は出ているけれども、お店は地元天満のすぐそこ。突撃して店主の赤尾江里子さんにお話をうかがってきました。

「いらっしゃいませ」と笑顔で迎えてくれた赤尾さん。「これが『天満天神えーる』です」と、瓶をカウンターへ置いてくださいました。まず衝撃を受けたのが、ビール瓶のラベル。真んなかにはヒョウ柄の顔デカおばちゃんが、背景には天神祭の様子が描かれています。およそビールのラベルっぽくありません。調べてみると、天満を拠点に活動している絵本作家の長谷川義史先生の筆によるものでした。

ビールづくりの明暗を分けるのは、用いられる水です。『天満天神えーる』には、大阪天満宮の御神水が使われています。1度は枯れてしまった天満の水ですが、それを復活させたい！と商店街と関西大学が共同でプロジェクトを立ち上げ、御神水が復活したのです。それが2014年（平成26年）。『天満天神えーる』には、そんな天満の水が使われているんです。ちなみにまろやかな軟水。

瓶をくるっとまわして裏向けると、原材料の欄に「昆布」という文字を発見。昆布だしのビールを飲むのはこれが初めてです。赤尾さんが「さあ、どうぞ」と開栓。お借りしたお店のグラスに、ダークエールを注ぎます。上部に浮かぶきめ細かい泡。まずは1口、喉で味わってみました。うん、まろやか！　あとからほんのり苦みが追い掛けてきます。軟水なので、飲み口が抜群。うま味を出すための昆布も、主張し過ぎず、ほどよく調和しています。2023年（令和5年）7月23日に、天満天神MAIDO屋で発売がはじまった『天満天神えーる』。すでに多数のリピーターを生んでいるのだとか。おつまみと一緒に買うお客さんもいるのでは？と思い、赤尾さんにたずねてみました。「石見食品の『ヘルメスソースのぬれやき煎』を天神えーると一緒に買わはるお客さんが多いですね」とおっしゃいました。ダークビールと大阪の地ソース、ヘルメスソースで味付けされたぬれやき煎との相性はばっちりでしょう。

『天満天神えーる』を、地ビールが大好きな人への手みやげにどうですか？　昆布だしのクラフトビールなんてかなりレアです。おばちゃんが描かれたラベルは部屋に飾りたくなるかも？　内容量330mlのミニサイズなので、かさばりません。天満天神MAIDO屋では、こちらのビールを700円（税込）で販売中です。

また天神橋3丁目商店街にある『天満天神飯店』では、本格中華に舌鼓を打ちながら『天満天神えーる』を飲むこともできます。定休日は毎週水曜日と第3木曜日です。（高田 豪）

大阪渋谷麦酒
shibutanibrewing.com

【取扱店舗】
天満天神 MAIDO 屋
天神橋２丁目 1-23
営業／ 11:00～18:30
無休（年末年始休）
※ほか「プロマート天満店」等取扱
さらに取扱店募集中！
（天神橋筋商店街地域限定）

インディーズ系社会学者の北区マップ考現學

大阪天満宮表大門脇にある巨大イラスト案内図

大阪天満宮の表大門のすぐ右手に、境内の巨大な案内図が掲示されているのをご存じでしょうか。80年代テイストのポップなイラストによって、外国人も含む多様な参拝客、巫女さん、梅花殿で式を挙げる新郎新婦、境内でランニングをする人々など、通常の地図には描かれない人間の姿までもが過剰なほどにギッシリ描かれている、とてもにぎやかで楽しいマップです。しかし、この案内図は「大阪天満宮」の文字が彫られた大きな石碑の裏側に隠れ、石柱の柵に囲まれていることもあって、私はつい最近までその存在に気付きませんでした。これは一体いつ誰がつくったものなのだろう？と気になり、天満宮で禰宜を務めておられる柳野等さんにうかがったところ、詳しいことは分からないとのお返事。そこで、前任の禰宜・岸本政夫さんに聞いていただくと、経緯が明らかになりました。

案内図がつくられたのは、やはり80年代。1987年（昭和62年）に、地域活性化事業に取り組む伴ピーアール（株）の元社長・伴一郎さんが、参拝客へのサービスとして案内図制作を発案。境内の清掃サービスを請け負い、『二十日会』と呼ばれる清掃奉仕会を実施していた第一建築サービス（株）が、その300回記念の奉納品として経費を負担し、案内図が設置されることになったそうです。伴さんはもう亡くなられていますが、70年代から80年代にかけて観光ガイドブックで流行したデフォルメ満載のイラストマップの手法を神社の境内図に用いるのは、当時としても斬新なアイデアだったのではないでしょうか。

柳野さんが禰宜に就任したのは、それから5年後の1992年（平成4年）。当時は文字通り境内の「案内図」として機能していたので、それほど気に留めることもなかったそうですが、さらに30年以上が経過した今、案内図の存在意義は変化してきています。「あらためてマップを見ると、昔の天満宮の様子がよく分かります。御神水舎や繁昌亭が新たにできたりして、あれから変わった部分も少なくないので、若い神職にとっては勉強になると思います。逆に、昔から天満宮に親しんでおられる氏子さんたちにとっては懐かしいでしょうね」と柳野さん。

1996年（平成8年）には、案内図の横にある随身舎の改修工事に伴って、一緒に柵で囲まれることになったそうですが、それでも先代宮司の判断で案内図は撤去されずに、今に至ります。「今でも柵の外から斜めにマップを眺めている人がいますが、あそこにあっても、あんまり見てもらえないですよね。30年以上前のものなので、案内図としては混乱を招くものになっていて、劣化もしているので、今後撤去される可能性はあります。でもいいマップなので、4年後に式年大祭の記念事業として改修される宝物殿の外側に展示して、過去の史料として活用するのもいいかもしれません」。「正直、今まで案内図のことをそんなに重く考えていたわけではないのですが、それでも誰も撤去しようとはしませんでした。ずっと同じ場所にあり続ける神社には、何かを残していく役割があります。案内図もその1つですね」。柳野さんがこう語るように、アナログのマップは必ず古くなりますが、だからこそ歴史を刻むことができるのです。データが更新されると古いものが見えなくなるデジタルマップとは違って。（松岡慧祐）

彼女とキタのラブストーリー
――第二十二回――

兵庫県立大学 学長特別補佐（国際戦略・広報担当）
国際商経学部 教授
タマシ・カルメン さん

つひまぶ前号『天満の手しごと号』で、池田畳工業所を紹介している記事があります。池田畳工業所7代目の池田和夫さんは、リアルえべっさん⁉として、北区では知る人ぞ知る人物なのですが、誌面に掲載された池田さんの横には、外国人の女性が寄り添っています。彼女は誰…？　気になりますよね？　気になりまして、彼女はルーマニア出身の文化人類学者タマシ・カルメンさん。天神祭をはじめとした日本の祭りや儀礼などを研究する兵庫県立大学国際商経学部の教授！

一体、どんな経緯でルーマニアから日本へやって来て、天神祭を研究することになったのでしょう？

写真集で見た日本に魅せられて

タマシさんが生まれたのは１９７９年（昭和54年）。当時のルーマニアは、チャウシェスクの独裁国家で、社会主義の国でした。娯楽は少なく、音楽を聞くカセットテープやゲームなども身近なものではなかったそうです。テレビはあっても番組は夜のニュース程度で、海外のことを知る機会もありません。日本のことは知っていても、地図上のことだけ。

そんななか、タマシさんが初めて日本を意識したのは9歳のころ。ルーマニア人がつくった日本の写真集を、近所に住む祖母の友人の家で見せてもらいました。「写真集に写し出された日本のイメージに引かれたんです」とタマシさん。

『ＪＡＰＯＮＩＡ』とタイトルが書かれた写真集の表紙は、茶道をたしなむ女性。ページをめくると日本らしい寺社仏閣はもちろん、電車や制服を着た小学生など日本の日常の風景もたくさん写し出されていました。想像も付かない世界に心を奪われたタマシさん。「私は絶対に日本に行く！」。そのとき〝決めた〟そうです。

その写真集がどうしても欲しいとねだりますが、当時は大変貴重なもの。なかなか譲ってもらえませんでしたが、最後はお父さんが20リットルのワインと交換して手に入れてくれたそうです。タマシさんの実家では、祖父母がワインの醸造をされていたんですって！

たった10人の難関突破

日本に行く！　そう決めたタマシさんは、まずは日本語を学ぼうと考えます。

当時のルーマニアは、小学校、中学校、高校とすべて4年制で、高校へ進学する際には、大学についても考えておく必要があったそうです。

ルーマニアで日本語を学ぶことができるのはブカレスト大学だけで、日本語学科の定員はなんと、たったの10人！　競争率は12倍を超えていたそうです。

日本のように、たくさんの大学を受験することはできず、1つの大学・1つの学科しか受験できない一発勝負。しかもテストでは、最低でも92点を取らないといけなかったのだとか。

そんな難関を突破して、見事ブカレスト大学日本語学科で日本語を学ぶことになったタマシさんの次にかなえる夢はついに、「日本に行く！」です。

初めての日本

日本で初めて訪れた地は、奈良でした。

２００１年（平成13年）に留学生として来日し、1年間を過ごしたそうです。ブカレスト大学が提携していた留学先は、学習院大学と奈良教育大学の2つ。日本の古い文化が好きだったタマシさんは、奈良教育大学を選びました。

「奈良に来てびっくりしたのは、シカがいたこと！」とタマシさん。ルーマニアには、「シカのように恥ずかしい」という表現があるそうです。それくらいシカは恥ずかしがり屋で、人に気付くとすぐに逃げてしまうため、見掛けることはほとんどないそうです。そのシカが、目の前にたくさんいてそこらじゅうを歩き、寝そべり、あたりまえのように自ら人間に食べ物を求めて寄ってくる奈良の日常は、確かに驚くべき光景だったことでしょう。

1年間の留学生活を終え、ルーマニアに帰国されたタマシさんですが、２００４年（平成16年）4月、再び来日します。今度は大阪外国語大学（現在は大阪大学に統合）の大学院生としてでした。

日本での好きな食べ物は、ちょっと意外なことに、「洋食、ピラフがおいしかった！」。

私たち日本人になじみのないルーマニア料理は、トルコ料理に近いそう。「野菜と肉の煮込み料理。そして、チーズが多く使われます」。

西洋の人が日本に来て、困るのは、やはり箸。店で丼を食べるときにフォークをお願いすると、出てきたのはデザート用の小さなフォーク…。日本で暮らすなら箸の使い方を学ぶべきだなと思い、さまざまなものを箸で食べることに挑戦。きれいに使えるよう練習したそうです。

日本文化を教える

「日本は、私に合っていると思います。私のメンタリティーが日本人っぽいんです」とタマシさん。なんでもきっちりしていないと気持ち悪いそうです。時間もきっちりがいい。「なるほど、電車がきっちり来るとか、日本ならではって聞きますもんね…」と言うと、「ダメよ！　ＪＲ神戸線は、しょっちゅう遅れるんだから！」と、関西人か⁉と思う返しが来るほど、日本になじんでいます。

そんな現在のタマシさんは、兵庫県立大学国際商経学部の教授。文化人類学が専門ですが、国際商経学と文化人類学、どう結び付くのでしょうか？

1つには、留学生の存在がありました。国際商経学部では、２０１９年（平成31年）から日本文化プログラムを実施していて、毎年約30人の留学生が世界各国から入学してくるそうです。その留学生たちに、日本語や日本の文化を教えるのが、タマシさんの仕事です。

もう1つは、日本人の学生に日本の文化を教えることです。「日本の文化を知ることは、日本人にとっても大切なこと」とタマシさんは言います。自分が生まれ育った国について語れることはグローバルな社会において非常に重要ですが、日本について説明できる日本人は少ないと感じるそうです。あたりまえに生きていると、特別であることに気付かないものなのでしょうね。「私の授業を選択する日本人学生も多いですよ。日本の文化は知っているし、簡単だと思って選択するのだと思います。でも、意外と難しいようです。自分の国の文化について、じつは深く考えたことがない学生も多いです」とタマシさん。

天神祭を研究する

タマシさんは、日本の文化のなかでも特に、天神祭について深く研究をされています。

研究をはじめる前、２００５年（平成17年）には天神祭の船渡御の船に乗っていたそうです。最初は、船上から奉納花火を見て、食事をして、という一般客としての参加でした。ところがいつも船渡御に誘ってくれていた友人がじつは大阪天満宮の総代の親友で、天神祭を研究しませんか？と鳳講の講元を紹介してもらい、研究がスタートしました。２０１７年（平成29年）のことでした。

天神祭は、京都の祇園祭や東京の神田祭と並び、言わずと知れた日本三大祭りの1つです。しかし、「天神祭について日本語以外の言葉で研究論文を書こうとしているのは、おそらく私だけだと思います」とタマシさんは言います。祇園祭を研究した海外の文献はたくさんあるそうですが、天神祭はないのだとか。

タマシさんは、鳳講を中心にコミュニティや男らしさについて研究されています。

「祭りというと、男尊女卑の世界だと言われることもありますが、私の研究の結果では、差別というよりは役割分担だと考えます。神輿を担ぐのは決まって男性の役割ですが、それは力の弱い女性には難しいだけです」。鳳講での女性の役割は、着物の着付けや看護スタッフ、そしてお客さん、だそうです。確かに、祭りを楽しむお客さんも、祭りの盛り上がりには欠かせませんね。「昔は不平等があったのかもしれないけれど、今でも続いているとは言えません」。

祭りがコミュニティのなかでどういう役割をしているかについても、タマシさんは研究されています。祭りはコミュニティの基礎となるもので、地域住民のあいだに絆をつくります。大阪天満宮を中心としたコミュニティがつくられていますが、祭りがコミュニティの基礎的役割を果たすのは、世界共通だそう。さらに、「祭りはお祓い、つまりリニューアルです。終わったものを祓い、新しいものに祈るのです」。

「日本独特なのは、儀礼。儀礼には物語があります。それがすごくおもしろいですね。五穀豊穣を祈る祭り、雨乞いの祭り、それぞれの祭りに物語があります。天神祭も日本の古い歴史の物語が関わっています。大宰府に流された菅原道真を祀り、その命日におこなわれます」。

西欧では、良い・悪いがはっきりと区別されているそうですが、日本の神は人神で、善悪の区別がないのが特徴とのこと。大阪天満宮に祀られている菅原道真も、不遇の死ののちに怨霊となり、たたりが起こったと恐れられて、祀られるようになりました。霊を鎮め、神として祀れば、私たちを守ってくれる御霊となります。

「ルーマニア」の語源は「ローマ帝国」と言われ、紀元後３００年ごろからキリスト教の国だそうです。ギリシャ正教会が多く、年に1度、教会の聖人が祀られる大きな祭りがあるのだとか。「その日はみんなで集まって食事をしますね」。善なる聖人を祀り、悪いものは悪魔として恐れられる、ということです。

第2次世界大戦後、社会主義国家になった時代には宗教弾圧がありましたが、今日では宗教的な祭りも少し復活してきたようです。

天神祭をルーマニアに連れていく⁉

タマシさんのお住まいは中之島。奈良でスタートさせた日本での生活は、箕面市や堺市を経て、２０１３年（平成25年）より現在の中之島に。ルーマニア人のご主人ともども、大阪暮らしが気に入っているとのこと。中之島を選んだのは、「景色がきれいだから。暮らしはじめて10年以上経った今でも、散歩の途中に写真をよく撮りますよ」とタマシさん。ルーマニアが恋しくなったりはしないのでしょうか？

「恋しいときもあるけれど、時々帰っているし、夫には、タマシはルーマニアで生活するのは無理じゃない？　日本のほうがいいよと言われました」と笑います。

今年の天神祭では、兵庫県立大学の留学生のみなさんを連れて、鳳講に参加されました。天神祭に参加するという貴重な経験は、学生さんにとっても忘れられない思い出となったことでしょう。

そんなタマシさんの直近の一大イベントは、「天神祭をルーマニアへ連れていく！」こと。この11月4・5日、ルーマニアでは「日本文化の日」としてさまざまなイベントがおこなわれるそうです。そこに天神祭を登場させるのです。子ども神輿と天神講の獅子舞、地車講の龍踊り、権禰宜と宮司さんも併せて23人もの人がルーマニアに渡り、天神祭を再現するのだとか。タマシさんと天神祭の出合いがなければ、こんな機会が訪れることはなかったのでは⁉　ぜひ土産話を聞かせていただきたいものです。

最後にタマシさんの夢をお聞きしましょう。

「天神祭について英語の本を書きたい。まだ誰も出してないですから！」。

（終）

聞き手・書き手／秋山暁子